



上から本殿・拝殿・楼門

まつのを

第二十九号

巻頭言

東日本大震災から五年が経過しました。時の経つのは本当に早いものであるとつくづく感じます。

阪神淡路大震災の時は、五年でほぼ仮設住宅が撤去されましたが、東北では今でも十七万人の方々が仮設住宅や仮住まいをされているそうです。

被災の規模が違った事は確かですが、阪神淡路との大きな違いは、戻りたくても自分の土地に戻る事が出来ない人々が沢山居られるという事です。

津波の被害を受けた地域では、法律で居住が禁止されたり、原発事故の被害を受けた地域では、除染作業が予定通りに進まなかったりとか、理由はさまざまですが、避難先での心労や自殺等で亡くなった方、震災関連死の数は三千人以上と発表されています。

確かに将来を見据え、住居の高台移転や土地の高上げは必要かもしれませんが、高齢者にとっては残された時間が少ないのも事実です。結局は故郷に帰ることを断念する人達も出てくることとなります。

震災の際の住民の整然とした行動や、救助に当たる皆さんの献身的な活動等、世界から賞賛されているのは国民個々人の意識の高さと行動力であり、それが国家ではないところに今の日本の現状がよく現れています。

党利党略の離合集散ばかりを繰り返し、新政党の名前すら自分達で決められずに公募するような政治家に、果たしてこの国の未来を託せるのだろうか、との思いは決して私一人だけでは無いと思います。

与野党一丸となつての復興計画の更なるスピードアップと、地域のニーズに合わせたきめ細かな復興を推し進めていくことこそが、政治の信頼を取り戻す一番の近道ではないかと考えるのですが。

(伴)